

修了生の皆さんへ——お祝いの言葉

本日は、修了、おめでとうございます!本来でしたら、修了式で一人ひとりに学位記を授与してお祝いするところですが、残念ながら、今年度はこのような形になってしまいました。しかし、これはこれとして、自分たちの大事な修了の年として記憶に留めておいてください。後で振り返るとき、また別の意味で特別な感慨が蘇ってくると思います。

修了される皆さん全員、人文社会科学の学問をそれぞれの分野・領域で学び、またそれぞれ自分の視点から取り上げたテーマを、限られた時間の範囲で、ギリギリのところまで追求し、論文に纏めたことと思います。もちろん、もっとやりたいこと、補いたいこと、修正したいところなど残ってはいると思いますが、それはこれからの更なる課題として取り組み続けていったらいいと思います。

人文社会系の学問といえば、よく、その役割——どんな風に社会と関わるのか、どんな風に社会に役立つのかなど——が指摘されます。デジタル化が目まぐるしく進む社会の中で、ますますそれが問われるところですが、そのような社会になればなるほど、逆に、皆さんが学び、研究してきたことが重要になってくることが指摘されています。最近、society5.0 といった用語をよく耳にしたいと思います。これは、デジタル技術が進歩・発達した先にある社会のイメージで、技術的な進歩・発達が行きついた先には、それが人やその生活とどう融合していくべきか、人の生活の豊かさやどう結びついていくのかという問題を提起するもので、AI 化が進んで行く近未来的な社会における人の在り方、生活の在り方、そして人間関係の在り方を提示するものです。そして、そのような将来的に想定される社会においては、人を中心に据えた問題、つまり、人文社会的な視点、発想、思考、また人の心理、感情、情緒の問題などが逆にいっそう重要になるということです。つまり、皆さんが本教育部で学び、身に付けた専門力、思考力、判断力が今後一層重要で、必要なものになるということです。

お話ししたように、専門的に学んだこと、また取り組んだ研究はもちろん重要で貴重なものですが、それを通して知った苦しみや楽しさ、その過程で得た先生や友人とのつながりもまた、かけがえのない、貴重なもので、それは一生の宝となるものです。皆さんがそれぞれに本教育部で得たものを、頭に、また心に刻み、誇りを持って飛び立ち、それぞれの道で活躍することを心から願っています。

令和3年3月25日
大学院社会文化科学教育部長
隈元貞広